

2022年12月

中村和弘

<光線>

風雪に目鼻あるごと冬構  
廃校に満ちているなり翳雲  
不発弾現れそうな小春風  
止木に四肢ふむごとく檻の鷺  
光線をふつと恐れて聖夜かな  
冬麗の手の切れそうな榊の葉  
アンモナイトの化石を撫でて年詰まる

大石雄鬼

<街遠し>

秋蝶の緩みのやうに湯の沸けり  
唐辛子干して窓枠朽ちてをり  
鳩笛の穴やはらかに街遠し  
馬の背の曲がつてゆけば秋時雨  
干柿を広い男が食べてゐる  
背はとほくこほろぎのなかあたたかし  
晩秋の爪白ければ海荒るる

中村和弘の選ぶ20句

飼はれみる巨大田螺や秋暑し	浅沼真規子
暈の目の足裏にさやか魂まつり	岩崎嘉子
天上にありし砂畑ばつた飛ぶ	吉本のぶこ
背景はいつもぼんやり曼珠沙華	佐藤禎子
虫喰いの粉噴く小檜風死せり	十亀カッ子
飛行機に朝顔のつるひつばられ	小林政女
引きこもる窓に唸りし秋の蠅	鎌田史子
その日より人の貌して芒付つ	佐々木貴子
蟬の穴羅列つづきに日を沈め	徳竹三三男
岩が根に色添ふ小雨ゐのこづち	猪狩鳳保

蟬落ちてひたひたとくる水の音	中村穂
秋縹の雨に飛びたり訳しらず	保坂純子
猫じやらし跨げば母の遠くなる	古川章雨
参詣の山鎮まりて水澄めり	田中三桃
アルプスの花野貫く径白し	根岸三恵子
スマホより楽曲とべり星月夜	土岐詳恵
路地裏の猫も出て来る秋日和	西村敏子
曼珠沙華木洩れ日の金撒きながら	小村寿子
月のした鎖の音の小詩集	三宅桃子
的までは草の花波弓道場	森あづさ

2022年11月

中村和弘

<釣瓶落し>

枯原に立体マスク突き出たり  
銅鐸の平たくなって菊の宴  
港湾にタンク列なり秋思かな  
蓑虫の自ら揺れて泣くごとし  
馬追の影を障子に熟睡（うまい）せり  
ベトナムにて  
水牛に少女乗りくる刈田かな  
何か死す釣瓶落しの渚かな

大石雄鬼

<月光>

腕時計の裏の愉快的な文字涼し  
月光の涎のなかにゐるごとし  
狒犬の苔はちきれて九月くる  
蒲団に書はみだしてくる秋彼岸  
風船のやうな頭で大根蒔く  
秋晴れて龍角散をひそませる  
心臓のほつそりとして木の実落つ

中村和弘の選ぶ20句

かまきりの大きな妻をもてあます	小菅白藤
もう神のおらぬ明るさ鴟猛る	吉本のぶこ
夏蝶の青色混じる芥掃く	佐藤禎子
火砕流冷えた森に咲く山百合	山本高分子
西日のドック黒く納まる巨大船	十亀カツ子
ふるさとへ炎ゆる鉄橋渡るかな	大野和加子
DDTにはあらず白髪の八月十五日	牧 ひろし
三内丸山縄文時代の酷暑かな	大瀬響史
精霊船夕日の湖に彩（いろ）めく風	今田 克
まんどろの夜をつぶれているトマト	佐々木貴子

原爆忌猫にも水の器あり	中村 穂
まつ白な月光に石積んでゐる	藤川夕海
鮮やかな草に染まりしいぼむしり	根岸三恵子
顔剃るや鉄の匂いす終戦日	古川章雨
貝塚に人の匂ひや日の盛り	別所弘子
蓮の花泥より出でて泥に散る	平 恵
病院の壁に遥かな夏木揺る	保坂純子
星月夜世界はまるで二人きり	大高 碧
蝸や地熱ののぼる磨崖仏	安住正子
夏の雨細く息して老兎ゐる	菅原由香

2022年10月

2022年10月

中村和弘

<白き蟹>

灼熱の砂丘のどこか虫鳴けり  
秋暁の芥が畝成す渚かな  
砂浴びの犀の背中に小鳥くる  
炎を噴ける海上油田霧の中  
海底に白き蟹群れ良夜かな  
堆積の泥つきぬけて曼珠沙華  
沖縄のガマを眼下に生姜掘る

大石雄鬼

<神のほつれ>

八月に小学生が詰まつてゐる  
蛇見しは木の実のやうに眠り落つ  
踊の輪とぎれしままの街がある  
鮎錆びて転校生の足小さし  
秋めいて神のほつれのごとき雨  
みづうみの髪分け目を鵜来る  
櫂の洞のうつとりとして秋の雲

中村和弘の選ぶ20句

初鮎を花なき皿に横たへり	牧ひろし
不意に発つヤンマよ異形の殻残し	石川真木子
はらばえば闇もはらばう秋思かな	吉本のぶこ
口笛の口して日傘しぼるかな	瀬間陽子
子規に妹龍馬に姉の茗荷汁	大類つとむ
見当の先まで深く桃傷む	加藤明虫
戻り梅雨中央分離帯に靴	佐藤禎子
土に還る切株冥し盆が来る	十亀カツ子

テレサテン宋詞を唱ふ声涼し	今田述
星々の消える音して髪洗う	佐々木貴子
卓上のこぼれ酒なめ蠅生る	徳竹三三男
一房のぶだうをくれし異国の子	古閑容子
髪洗ふこの世明るく思ふほど	小保方京司
夕食のカート早や来ぬ大西日	田中七子
陽が射せば光の奔る蜘蛛の糸	佐々木玉枝
パソコンもスマホも恐れ大暑かな	松浦廣江
高階の灼ける匂ひにおちつかず	松川和子
ひと舟を屑と呼ばるる糶金魚	松本清美
傘ひらくお花畑の音したる	三宅桃子
深くなる波の音聴く熱帯夜	小橋めぐみ

2022年9月

中村和弘

<悪路>

天地の塵泥まとい夏の草  
東海の沖へ向けたり茄子の馬  
空蟬の四肢の強さよ昼下り  
出水跡の乾きし泥に蟬の穴  
空蟬の瓜をたてたるたなごころ  
仮設住居の屋根に吹かれて葛の花  
満月の弾むがごとく悪路かな

大石雄鬼

<口の奥まで>

蜜蜂の眼をして神津島を見る  
麦刈の顔のままなり吊革掴む  
じやがいもの花の盛りは神揺るる  
鎌倉の口の奥まで枇杷実る  
甲州の胸より冷えし蚊喰鳥  
夏の果頭ちひさな虫集まる  
カーテンを縛りわすれて新酒酌む

中村和弘の選ぶ20句

梅雨晴や干し物みんな生きてゐる  
骨の恐竜吼える卯の花月夜なり  
滝のおとだと気づかずに離婚かな  
プーチンの瞬かぬ眼や時計草  
預言書の怒りの日なり夏の雲  
虎が雨湖底となりし七ヶ宿  
よき声の主を探せばアカショウビン  
一群は飛び立ちてあり花菖蒲  
はつなつや夕陽に淡き虫の頬

小菅白藤  
岩崎嘉子  
瀬間陽子  
石川真木子  
上田桜  
今田述  
大野和加子  
富田栄子  
佐々木貴子

白薔薇を押し上げ暁の静まれる  
四方の山薫りを吐きて太りゆく  
包まれて音が緑に立つ姿  
青山はここと決めたりほととぎす  
葉桜の暗く言霊よみがえる  
散り際の芳香ことに白牡丹  
湿原の水面に溢る夏の星  
猫柳川風少し生ぐさし  
街角の供花のほこり薄暑光  
迸るバラスト水に水母かな  
潮満ち来干潟へ垂るる花茨

徳竹三三男  
小保方京司  
木村詩織  
猪狩鳳保  
及川明子  
多摩川州  
古川章雨  
雨宮和彦  
佐藤かほる  
百目鬼英明  
安住正子



2022年8月

中村和弘

<裾野>

イワヒバリ

霊山のガレ場に鳴きて岩雲雀

きんうんも

金雲母透かして見れば暑さのみ

万緑の岩のどれもが火山礫

万緑に胎児のネガを翳し見る

土壁の芯の竹見え蟬しぐれ

死火山の裾野は長し麦の秋

千年杉の幹を流れて青時雨

大石雄鬼

<パラソル>

滝壺に触れし大きな虹がある

蠅打つて心に暖気かたまれり

夏料理の奥の小さな座礁船

煉瓦より天牛の飛んでくる

パラソルの破れの中の光明寺

プライベートよりも小さく金亀子

煉獄のととへばトマトに塩かける

中村和弘の選ぶ20句

十二湖の十二湖すべてみどりの日

デボン紀の魚は大口花銀杏

あかしょうびん

赤翡翠ひゆるると鳴けば床屋くる

霊園のミサに大きな蟻も来る

穏やかに青田鎮まる水の国

水口へ水を導く薄暑かな

雪溪の純白沁みて山葵咲く

ロシアよりプロパガンダの夏来たる

大瀬響史

佐藤禎子

岩崎嘉子

堀尚子

木村詩織

多摩川州

猪狩鳳保

前塚かいち

のどけしやペリカンの棲む島に泊つ  
牡丹や高僧ふはりと座しにけり  
川を行く船に柳の雨かかる  
神島の影濃くなりて夏の浜  
行く春や砂場に残る砂の山

スワトウ

汕頭の麻のハンカチ黄ばみけり  
磯遊びしばらく残る波の音  
大櫂光泡立つ若葉かな  
桐の花からこぼれてしまふ砂鉄  
初夏の銃口睨むダビデ像

チセ

蛇交る動かぬ時間笹小屋の跡

根岸三恵子  
小川七穂  
森池義子  
別所弘子  
山田和歌子

宇佐川うさこ  
清水山植子  
内海 新  
小田桐妙女  
彩斗十明

百目鬼英明

2022年7月号

中村和弘

<蛇髪>

神宮の鳥居はやくも梅雨湿り  
蛸いつしゆん花の如くに開きけり  
万緑に銃音めきしバイクかな  
雲の峰大水槽に映りおり  
アポロンの蛇髪めきたる夏日かな  
蛇髪=髪が蛇のようにになっていること  
青バナナ千本垂し雲の峰  
電線を猿の渡りて溽暑かな

大石雄鬼

<剥きだし>

蚕豆のゆたかな丘に迷ひこむ  
あの世から来て剥きだしの雨蛙  
夏至の夜の講演足が生えてゐる  
ツナ缶の方舟めいて溽暑かな  
沢瀉の花の影から歩道橋  
積乱雲の下で目高が卵生む  
白鼻芯の眠りのなかに滝がある

中村和弘の選ぶ20句

薄氷に愚直な程の空の紺  
春満月地震で毀れし障子より  
花万朶奈落の底がギィと鳴る  
ビル工事黒網垂らし花曇り  
ものの芽の爆発はまだ内輪もめ  
翠玉の子蜘蛛にそわと夜の風  
夕桜のまんなかに居る揺らぎかな  
花の夜陰しき顔のアナウンサー

稲村茂樹  
浅沼真規子  
佐藤禎子  
加藤明虫  
渡部洋一  
佐々木貴子  
及川明子  
石堂つね子

受験生ぶらりと降りる無人駅  
雉子鳴くやものみな蒼む飛鳥川  
青春の肖像つねに啄木忌

っ

媪連れ玉なす桜くぐりけり  
戦地の名いくつも覚ゆ花の冷え  
夢なかの吾春眠をむさぼりぬ  
砲撃に取り残されしぶらんこよ  
しらじらと闇にかけたる花衣  
夜桜や月の時空に迷ひ込む  
ゆつくりと余命告げくるなめくじら  
足の指そらしてさみし蝶の昼  
北天の隅より枝垂桜かな

小保方京司  
猪狩鳳保  
多摩川州

田中七子  
古川章雨  
田中三桃  
山田和歌子  
土岐詳恵  
桜田花音  
石井節子  
朴美代子  
比嘉俊子

2022年6月号

中村和弘

<錆の塊>

玄室に蒲公英の絮浮びおり  
戦車みな錆の塊聖五月  
蒟蒻の灰汁の浮びて夏に入る  
空井戸の底は荒野よ夏に入る  
ギリシヤ神の石像に翳梅雨に入る  
石垣の継目に滲みて走り梅雨  
象亀の甲羅に重き梅雨の空

大石雄鬼

<天からの塵>

心の中のガラスのやうに鶴引けり  
天からの塵の見たる朝寝かな  
母の日のベランダ乾きすぎてゐる  
鍋敷のすこしづれたる清和かな  
天麩羅のかさかさとして虹立てり  
麦藁の刺さりあひたる武装かな  
靴底のひろびろトマト畑かな

中村和弘の選ぶ20句

晩年のカードのやうに蝶の来る	小菅白藤
陽は春の書庫に虜の楽士たち	岩崎嘉子
はんぎきを神話のように覗きおり	吉本のぶこ
風船のにおい途方に暮れている	瀬間陽子
さわさわと植物工場よりレタス	佐藤禎子
善知鳥村いま外ヶ浜雁供養	牧ひろし
溶岩原にささりし奇岩草青む	岩沢みえ

春の雪侘びるごとくに柔らかし	鎌田史子
巢作りの鴉や汐木銜え跳ぶ	荒堀かおる
いくさ雲よりぼっぼっと雪の華	佐々木貴子
一瞬の鯨の尾鰭春の月	中村穂
人形の目に遠いインドの春祭り	西牟田ふみ子
啓蟄や気仙沼語の優しかり	及川明子
雛の間へ飛び込んでくる砲撃戦	山田和歌子
落椿鯉につつかれ独楽となり	伊藤岳栄
脱藩の峠見晴らす土佐水木	土岐詳恵
南から北へ向つて山笑う	森池義子
ウクライナの戦火に	
釈迦よ耶蘇よせめて無辜の子春の虹	吉川孝子
種びたし異国を覗くように見る	三宅桃子
ゲルニカに未完の余白冴返る	彩斗十明

2022年5月号

中村和弘

<草千里>

遠き日の土葬のにおい春暑し  
戦中の土葬の跡か花の影  
戦場の花菜炒めて老婆生く  
防空壕の壁に生まれしなめくじら  
したたかに鉾杉撃ちて春の雷  
谷奥に籠もり鳴りして春の雷  
狼の洞穴のこり草千里

大石雄鬼

<桜蕊降る>

船頭のこくと冬の昂かな  
啓蟄の骨はみだして空がある  
朧夜の話の皺になりやすし  
花守の箆笥のやうな顔をする  
電柱の衰へてゐる花篝  
桜蕊降るどこにでもはひる腕  
仏生会沼のやうなるからだして

紅梅いま小猫の乳首泡立てり	岩崎嘉子
縞ゆるめずに蜂が来る父が来る	吉本のぶこ
鉛筆に君のほとぼり春立てり	瀬間陽子
神饌やぬた場に溜る春霞	石川真木子
霞む俯瞰町は息づく光藓	杉山鮎水
椿からせわしく松へ目白来る	荒堀かおる
富士を呑む大日輪や春立てり	今田克
雪ふゆる臍の奥より嘎れ声	佐々木貴子
寒晴の空叩き来るヘリコプター	徳竹三三男
新巻の片身を照らす夕日かな	多摩川州
冬の蠅鏡に夜が来ていたり	及川明子
春の土一握りして立ち上がる	小保方京司

深奥の真珠吐き出すシンビジウム 木村詩織  
百年の深き森林水ぬるむ 森池義子  
氷原の墓地に鯨の骨光る 山田和歌子  
レタスの芯好む鸚哥の一羽かな 宇佐川うさこ  
力石祀られてをり午祭 根岸三恵子  
針山にひそむ針あり三島の忌 石井節子  
新月を胸に突き刺す便りかな 伊予守  
鉛筆で蚕に翳り足しにけり 三宅桃子



2022年4月号

中村和弘

<薬莢>

牛舎より靄のごときが野梅咲く  
鶏に耳の跡あり春暑し  
灯台のレンズぶ厚し花ぐもり  
神木の数多の瘤にひこばゆる  
青海波三十周年を祝い  
強東風に阿波の土柱ゆるぎなし  
「戦争と平和」座右に鳥曇  
薬莢を拾いしことも麦踏み

大石雄鬼

<裏声>

筋肉が地球にあふれ田を打てり  
国歌すぐ裏声になり鶴引けり  
世論からパンころがりて蛇出づる  
抵抗の日々のながくて挿木せり  
空気入が枝のごとくに春満月  
潮干狩の手が象ほどに冷えてをり  
天から櫛落ちたるごとし犀星忌

<陸誌から中村和弘の選ぶ20句>

祝祭のように春泥浴びにけり	吉本のぶこ
宝船母の木も父の木も揺れる	瀬間陽子
犬連れの一団集ふ寒き丘	加藤明虫
畏みて神主の視る氷面鏡	山本高分子
かわらけに甦る文字春隣	佐藤禎子
聴診器を胸に吹雪の窓眩し	大類準一
髑髏庵の朽ちたる雨戸雪催	十亀カツ子
雪捨ての川くろぐると膨れけり	堀 尚子

噴煙の今日は眠れり冬田打つ 今田克  
なつうめや破顔の虎の歩み寄る 石堂つね子  
うすらひを跳ぶ羽ばたきの腕かな 藤川夕海  
再びは帰らぬ家か落葉籠 田中七子  
初日影スマホの内の遺影にも 別所弘子  
雪連れて風は光を抜けて来る 清水山楂子  
雪原を割つて鉄路のかがやけり 桜田花音  
冬ざる薪積む家の童話めく 西村敏子  
凍空や樹間の奥まで透きとおる 森池義子  
遺伝子の糸くず付けて冬帽子 三宅桃子  
降る雪は淋しき場所に積もりけり 百目鬼英明  
習字紙ストーブ前に波の立つ 長谷川佐知子

2022年3月号

中村和弘

<棘の木>

砂丘には棘の木ばかり二月かな  
深層水にほのかな塩気雛まつり  
桜島の赤銅色に春近し  
廃舟の底に溜りて春の泥  
霊異記の頃の赤さに紅梅咲く  
切株の泡を垂して春の昼  
牛糞に乗りたる春の入日かな

大石雄鬼

<鷹渡る>

オムレツにくるまれし影冬木立  
われの手は山に沈んで鷹渡る  
寒雁の握りしめたるままの夜  
心臓を闇にかくして白鳥来る  
凍鶴に滴の満ちて吹かれけり  
麒麟見るとめや雑煮のすこし硬し  
建国記念日家のまんなかにてちぢむ

<陸誌から中村和弘の選ぶ20句>

鳶のほか動くものなし崖つらら	浅沼真規子
スニーカーを真つ白に干し枇杷の花	佐藤禎子
雪国やくち尖らせたまま眠る	瀬間陽子
死に場所は卵囊のそば枯蠅螂	山本高分子
赤き首級掲げ南天日和かな	杉山鮎水
枝先の揺れにいのちや冬日向	小木曾あや子
冬の虹向かう側のみぎはへり	堀 尚子

石切の音地底より冬ざるる

大類準一

路線バスの補助席に付く草虱

荒堀かおる

吹きおこる鼯の声も阿蘇原野

今田 克

蜜柑孤独なり刻まれし風の紋

佐々木貴子

十二月八日夜空に宇宙船

前塚かいち

猫二匹胡坐に入れて冬至の日

中村 穂

人の目をそぎ落したる冬木かな

小林千香子

降る雪を仰げば黒き花卉なり

古川章雨

非常ロピクトの男も冬に入る

平 恵

月蝕の闇に青鮫徘徊す

土岐詳恵

神田沙也加の笑顔映して冬満月

小橋めぐみ

てのひらの冬の金魚はあたたかい

小田桐妙女

救護室へ大白鳥の抱かれ来し

安住正子

---

2022年2月号

中村和弘

<神の春（うす）>

蛸壺の原罪めきて凍てており  
神の春（うす）寒九の水で洗いけり  
初雪を怖れるごとく鹿走る  
原子炉の生みたるごとき冬の虹  
咳しつつ埴輪は土に鎮（しず）みしか  
ゴムの木の樹液一滴去年今年  
流木を数多従え初日かな  
石焼藪の石丸々と初日かな

大石雄鬼

<葉紐>

枝に枝かさなりあへり古暦  
枯草を倒しオムレツ食べにゆく  
ごみ箱の口の大きな避寒宿  
白タイルの明るさをもて年暮るる  
寝正月より出てくれば烏賊白し  
絹糸は空よりやはらかき一月  
大寒の伝記の葉紐ながし

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

目の玉重し次々鮭の打たれゆく	浅沼真規子
紅葉且つ散るどこからか悲鳴	吉本のぶこ
ひつじ飼いの髪のまま寝る降誕祭	瀬間陽子
ごはごはと舗道の荒ぶ冬の月	加藤明虫
神在らぬ棚に朝礼杖が待つ	杉山鮎水
真空管の光の揺れる夜長かな	石川真木子

色変えぬ松に流るる加賀宝生	渡部洋一
数珠玉の冷たき粒を数へたり	秋元道子
あの家が売れたらしいと案山子起つ	荒堀かおる
雪をんな天空マンションワンルーム	今田克
秋深し透明人間神保町	石堂つね子
龍頭ごろんと置かれ竹と菊	木村詩織
荒縄に骨軋ませて雪囲ひ	田中三桃
水靄の流るる中を浮寝鳥	吉見弘子
室咲きの花は原色ばかりなり	宇佐川うさこ
馬肥ゆる島に残りし蒙古塚	根岸三恵子
屈葬のレプリカは赤子木の実降る	別所弘子
むささびの鳴くや論語の本開く	石井節子
臘月や棺の蓋に石の音	加藤浩二
踏まれたる石より生まれ草の花	松本清美

---

2022年1月号

中村和弘

<魚影>

教壇に冬木の影のとどきおり  
落雷に裂けし樹も入れ冬木かな  
熊笹を金色にして時雨かな  
浜名湖の魚影も失せて開戦日  
古代鮫の巨き化石に虹の彩  
獣道うつすら見えし時雨かな  
石焼藪の石丸丸と朝日かな  
初春や化石の貝の花模様

---

大石雄鬼

<色鳥>

萩刈つて親指ばかり汚れてゐる  
色鳥のくづれて地球といふ泥水  
天高し剃られる髯のやうに生き  
夜遊びの男しづかに柿を喰ふ  
青春のすぐ隣から曼殊沙華  
耳の穴ほどの街なり花芒  
冬霧に目をとちこめて母が来る

---

陸誌から中村和弘の選ぶ20句

ひとを待つ柱あたたか盆の月	瀬間陽子
四十雀黒ネクタイで群れ来たる	大野和加子
高瀬舟行きつ戻りつ水澄める	浪本恵子
太陽の塔を記憶に鳥渡る	富田栄子
一家皆画面と対話地虫鳴く	田中眞青
かなかなや流刑地跡はダム <span>の</span> 底	阿保子星
古る水の歩く廊下や十三夜	佐々木貴子

ぼてぼてと音のひしめく八重櫻	石堂つね子
廃屋の形骸残り真葛原	中村 穂
掛け玉子ふと生ぐさし雁渡る	保坂純子
馬肥やす土手茫々の薄原	田中三桃
天高し編隊飛行地鳴り生む	佐々木玉枝
草市や鈍く光れる花鋏	宇佐川うさこ
狼は護符にをさまり秋祭	土岐詳恵
白露なり青淵文庫灯りをり	根岸三恵子
オートバイ走り抜けるも虫の声	駒木みどり
縄文の土器の継目に鬼胡桃	桜田花音
鮭群れて百万都市を遡る	長谷川隆
釣り人の肩に背中に柳散る	池崎昌子